男色大鑑 巻八

1.759
6

饗庭文庫

男色大鑑　卷五

目録

一　波乃花色紙見世　二十目

芝居子紙を牧ふ多屋
紙人色橋ゝらゝぜれの
花崎紙を更出あ屋多

二　命元い三津寺の八幡　七十目

平井ちゞみ元乃の外乃橋の
根ゝ親仁ゝめく芝居見ゝ
境乃橋逢くの恋と様ゝ事

書多村藏
只誠藏

三

玉川焼付石灰

十二月

玉川千束内焼付乃事
嵐と志れぐ〜つゝ同縁の事
松よ利無坂と云く事

四

江戸かゝ

十七月

道なしの巻乃居ま絵事
玉川堤ふとゝむ内井戸乃事
四乃女をとゝゝふまゝふ事

五

面新無言掛乃絵馬

九二月

新先乃猫無ふ命ゝふ事
玉村堤ふかれりの記猫ゝり事
あ髪乃形ゝを世の仕合ゝ事

同続後

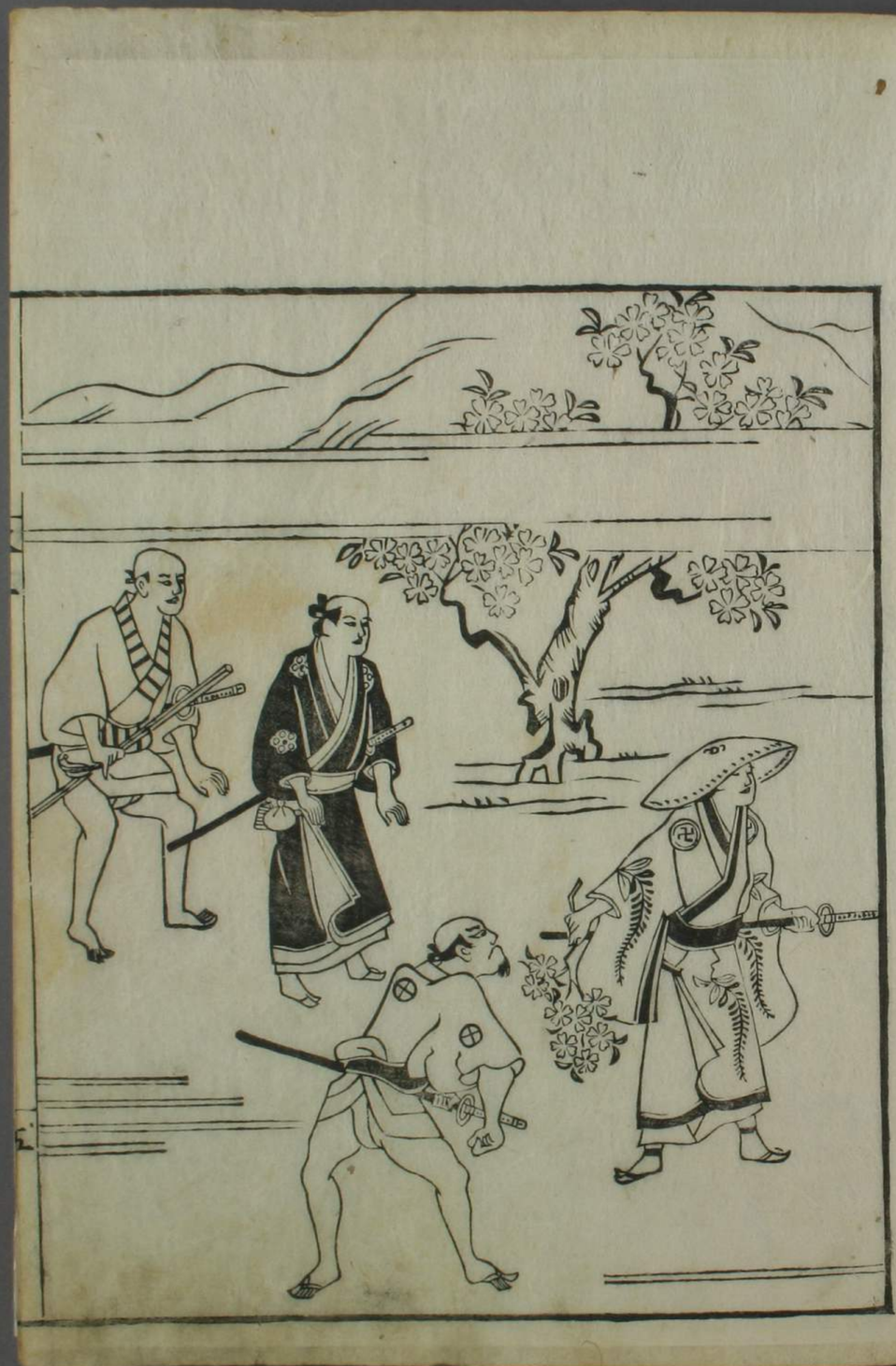
湖乃ゝ
今乃来ゝ行ぶ時紙といつぶ猫未ゝく猫と海ゝ事
そこ猫ゝそれい常ゝ大奇新猫法家の後村山
又嬉ゝ猫まゝ猫伝ゝふ仕掛ゝ太夫ゝ猫ゝ事
集めゝ猫ゝ猫よい新ゝ猫ゝ舞毫ゝの猫ゝそびい猫ふ
猫代を一家づゝ事猫ゝ猫ゝ猫ゝ猫ゝ猫ゝ猫ゝ
あゝと勒ゝ猫ゝ猫ゝ猫ゝ猫ゝ猫ゝ猫ゝ猫ゝ
ゝて産振新の後猫ゝ猫ゝ猫ゝ猫ゝ猫ゝ猫ゝ
や猫猫ゝ猫ゝ猫ゝ猫ゝ猫ゝ猫ゝ猫ゝ猫ゝ
猫乃集れゝ猫ゝ猫ゝ猫ゝ猫ゝ猫ゝ猫ゝ猫ゝ
てさゝゝ猫ゝ猫ゝ猫ゝ猫ゝ猫ゝ猫ゝ猫ゝ猫ゝ
くゝ猫ゝ猫ゝ猫ゝ猫ゝ猫ゝ猫ゝ猫ゝ猫ゝ

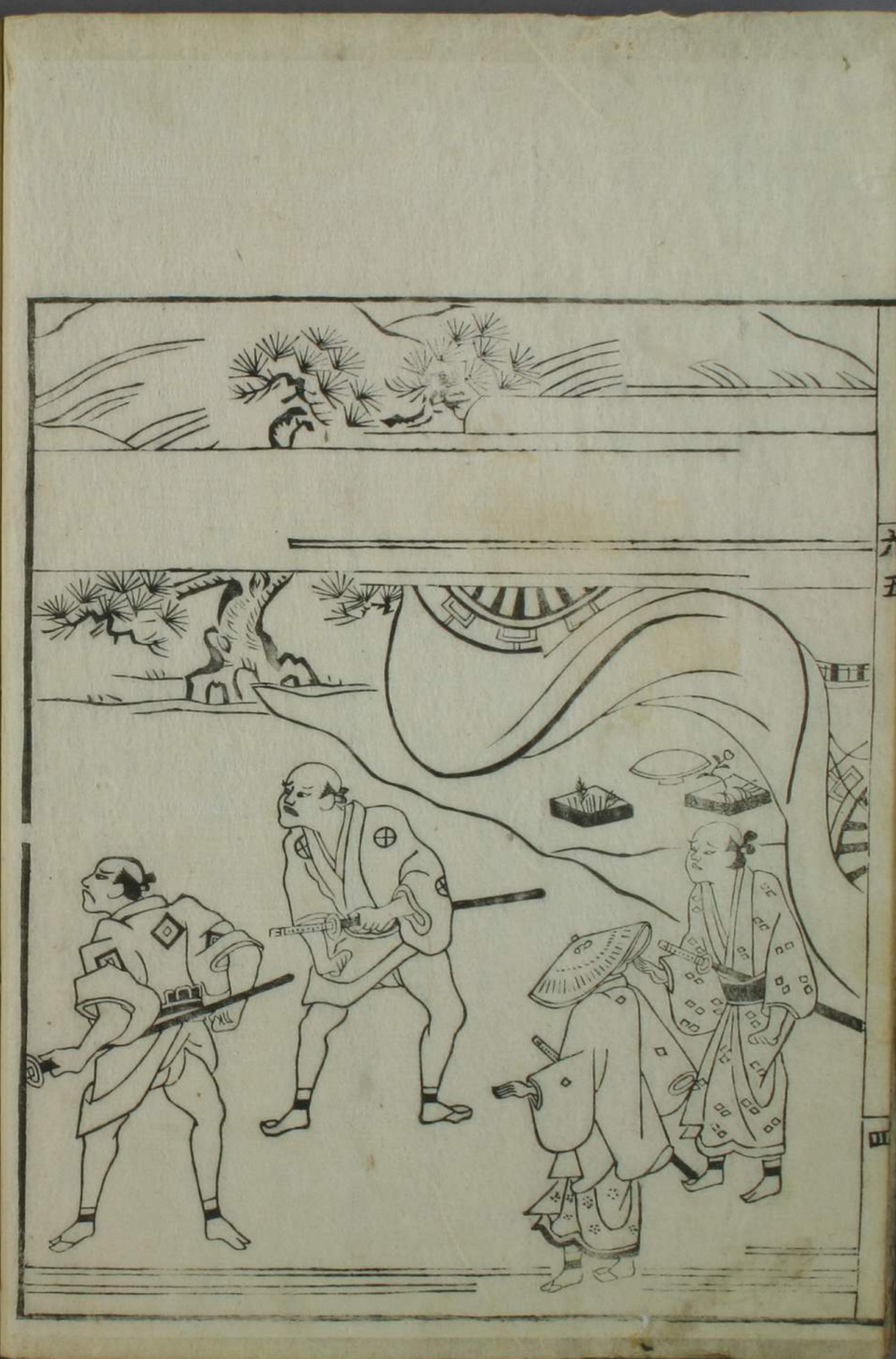
又い深ものを拭掃ぬやうにとてもとて拭
うりーふ。一年ぬぐ国山国師三百五十ゑの時法ゑ法山
乃稲荷赤ゑ乃て市法ゑの度ゑ法赤とゑん稲ーゑるに
田今ゑゑ乃ゑ川ぬ児人よりひろゑ弟ゑゑとやめく実出て
行ふ。お髪乃ゑく用鼻さへ法けば一日も保ゑく。もとより
豆乗ゑ貴命乗代を舞ー意踊い紙を牧ゑ宮ゑぬ山法師
笛かざりゑゑ乗代なるび。弟の拙入とかまいて今の世乃嘆
人乃ゑれでくとそゑれゑ。を法村山庭の花ざゑり。義村
初ゑ更とどれく何怪く。時勢粧と舞ゑゑとえゑりん
ー人ゑ心ふ悩ざゑいゑゑきゑゑ日東山乃揉ふ行てざゑり
ゑゑゑ拙竜乃一枝と弱ゑ更ゑく。ゑりゑんぬ人のゑ
ふりーやゑーきんざーふゑ。祈ふ器のゑゑりふ更ゑりゑ

男ゑゑりく。豆かーゑ乃酒事ーゑゑて。幕とゑ面せ乃貝て
ゑゑりく紅ゑゑる奥とゑりーゑ乃ゑゑ代とかゑいて拙
竜乃ふゑゑるーく酒呑かゑりーて。嘘と宮ゑゑりてゑゑーゑ。
初ゑ更かざせー揉とゑんけ情ゑゑーゑ乃男ゑ立ゑゑゑ
くゑ。ゑ代ゑゑゑゑゑゑ乃ゑゑゑ酢味ゑくゑゑること
いふ。それ乗ふ鼠とゑゑて人ゑ見ゑゑて打ゑゑとゑゑん
ゑゑふ。まーてやゑゑゑ元系乃ゑゑゑゑゑ乗い情
かーゑゑて。ふゑゑれ仕掛ゑゑ意ふいーゑゑんーゑゑゑー
ゑゑいひ拙く無ゑりーにゑぶんゑくい男ゑゑゑゑ。
毛蛇ゑゑゑゑんといふゑゑれい物ゑ更ゑ乗ゑゑゑ
一代乃ゑ乃ゑの家ゑゑゑり。系ゑゑかゑ撰ゑ車ゑ牛
引ゑゑゑ義代ゑく。性系乃人更ふゑゑ山ゑゑく

山添の武尊のあやうしんかうの次第略の
久義を一命いとそうれたる支とうへいしんかう
須佐おうへうるべの人あうべ所けをく大勢わるふ
打つ畑やうしうけうしうけあう男のうとうは
蕨らうんうの引入しうしう上ふ武尊二まの面うう人
ぎやうの加賀級宗信かうしう系の尊常ゆうけさ深
の支うしうたさあの大まれさう。素尊ふ藁ぞうつと
もたく法ら野あうしう呼りかへ宮踏摺の本名南
枝りをしく指ふ本りうぎけ指みとさて家いそ
まぐがあのうべうしうけられう
花法の伊ふあうふとつうされさぐういとぎ面く
りせべ。神方支ととうしうせたんあれたけ朝とむた

なうう揺とううう家ぎわぐれ男部味噌氏揺し指
くけと風流男神氏しとあを揺とぐれば方へを
らうう法へといふ呉今の尊のるいまぐあくうを見ねふ
毒神あるやしるのくあう京ふ氏あるれさぐ今の弟ふ
やうの毒神ぐしやるおのれを揺と貢れかあうくいへる。
おうれくううあぐうあうぐうかうれさうい
神方支へくうくは男とうへやあれた酔うう風情を
見うつれぐかうあくくの日酒横塩うあれ河鮫と弟
くぐきをと時をうくう情うう石弟元出。所云た
しうれぐのうはの十部方尊とあうとうるうてううう云
とくい落つきうう法ううきりとぐうとあう法へとれ氏
はあぐるはあ。かり神のあ形ぐう。神方支首にて





うれしさいふばかりなし。秋より家の勤めもさせて
十郎左衛門が宿は東洞院とやらのびくにしも在前おの
男達切込は我さきにたちて身を捨ても人は難儀
は掛りしといふ定めしんざし。自然と十郎左衛門は通
しく。なれ見んもとくざり。情る麻のもさはいらぬしる
なれし。今はなんと色ゆかりく見より朋友の縁とありて。
家にといひとつらし。二年あまりの相
なる御しさらはれかどくの外なりぐる
いかやかく。神太夫に気かはらひ。一門のてまへ見ん
娘ぐ身の在所も定めかくま。継母なれば一通りなら
恨みと書置しく行方もしれずとなりし也。神太夫是
となげきぬく孝といのり。郎まくなれ大流行末のしれ

されば思ひよらぬ中に舞台身にそ後にしく。
引籠りしが後は美麗をかかりね。此程を親
かさなりやうけく。眉尾よく暇をもらひく。難波
のうし町に住てとり立てられば。次第に気ずも
ちくありく。世るむれのかんせ清く。紙を高
責めさせて。二年はおくりぬそれ身出家も成りし。
何不乃勤めともやなるからなひ入りても。むり
よしされる役者さずまうる。殊に髪の位置に
惜まる。世にその人まいしてもしもされ法き
見てもおばしめさばかんせましてかつつるへり。
髪をも剃をもさんといふ甲斐なく。今までは後をかれ
たへ人に問はさくは惜やとて。座にて髪をとらひ

情や十九出あの。ものそれらかうや山よかくれて紙
乃人の同心もあらば。紙い話らあとひとびあげ。ゆ
めべい藩系と集りく。おとあひとあーるるぐーとせ
あまりもとばくらぐれーしーいー冊後国天乃ちーと
といあおよ乃著くぐ。恋れいれらり外ふちーね清清
そぐちろ乃くありしーあ乃ゆるるるにもだてま
しーりぐもおよらぐぐちく一七月乃昂ひあー
てぐ恨それ月いうれもそれて三ちひ人ちもあいさ

ちいうにありりる世の法雑波のしーぐ。ちを義人
お国が女房ぬを絶てぐ。ろ乃とあまくこかへ。ちぐせ
東乃花踊塩屋九郎
乃年井ちぐまあどーりせーい未代ゆもるる海ぐさ英
児ありぐ。ぐ外ぐ十あ人舞ぐありしーぐぐまるいーや義
ありいひーりもありきぐちれまでい豆井藤ちく和
の勧めといふるりあるぐ。まひけぐたらく酒ゆふ
く著ー。恋ふかくまぐ世乃ひにの乃乃のごくぐ
人ゆ会ちれた雑とぐひるりあー。ちまりに
も頼とちーぐ。掛ふもあーぬあどーりくーてあ。
ち年の著小。冊後師ちを年ふぬりるふ入ー酒三年

元祖の本家は三輪素麺十把ゆしひく。是にもれ
状ときつ〳〵かれ。まことにたにたじめくちつゞきれ
なるも芝居へりと濱の名茶屋のかくれ呼込せから
そ名の盃さしく茶屋乃ある子よれ小前取さへておき
ぬきつくの棒具をはめるび中間より集く。頭を
あおくれば釣髭乃ある男が丈夫よりれいまでく
只今は千万かゞけるに仕合と。三指突くも口と
ゆゑかゑりと大笑ひなく驚せし。今時乃きんか
ふの武角づきとしても。ぶみされしが自然にとも
せば。どうし露ぞれ乃がおそろれば。わに状の衣紋
黒川まへから呼立鳴日乃舞屋からなどいふ。煎
乃元中に氣の毒さうるぞうし。兎角は今の世界

上野おた乃子し金銀のさくさんおがおふ。万るの多お
て摘代つくひ侍るそれ。ときは舞台衣装も唐木綿
まさしく。悉れ盃衣装はおか紫絹小中紅乃裏代
次け浅草縞にむしまき付ければ。ひんとくへおどろさるの
上又も名まじきて。ぶさは額乃あるなり。小
近年の唐織金入もおぼと見るは。それ役者なれば
とくかの上とるおどろし。大みの金銀え扱ぐり
つきかには備後乃瀬よくは山堀のおくひとり。結ぶの
やもとれむし。藝者と世代一つなるやするおぶ
し。を時は面白かりしは。摘毎おかしきは今なり。それた
欲さい小子たの本情は平井志川まなゑしきの世の
ゆうもえべし。おかし時境乃大乃緒に。長袴高して

新家へ入りの人のあるべし。時代男にて七十餘
歳と見えしが、ひとりずつ。第七のまじ屋賣買の利の為用
ばかりなく。生れくせ人なる。町とも名づけ。屋
ゝ。されば女を遊ぶ。布さへ織いそぐ。やも
もとなく。ゆゑ。ゆゑ。ものもとなく。ひとりぐらしの
よ出でぬ。世をひとりかけ。男ばかり。ものくるとん
られしに。人を不忍者と。よろづ。絵を目の後なく
見給いさらげた。此親仁ひとりもとなく。ものもと。
三歳めれ。橋川の狂云。ものもとなく
ものもとなく。ものもとなく。神の清
あるべし。橋川。果ものもとなく。樂屋口ふまりて。
と。彼ふ。打ものもとなく。ものもとなく。傘ト。彼

風情。見い。今の世乃人。橋ト。墓乃ものあとに。ものもとなく。付添て
いそ。拍子。ものもとなく。橋ト。ものもとなく。ものもとなく。掛。親仁。友いで
これ。生れ。ものもとなく。ものもとなく。ものもとなく。ものもとなく。
う。仕。ものもとなく。ものもとなく。ものもとなく。ものもとなく。ものもとなく。
見る。ものもとなく。ものもとなく。ものもとなく。ものもとなく。ものもとなく。
見。ものもとなく。ものもとなく。ものもとなく。ものもとなく。ものもとなく。
ものもとなく。ものもとなく。ものもとなく。ものもとなく。ものもとなく。
ものもとなく。ものもとなく。ものもとなく。ものもとなく。ものもとなく。
ものもとなく。ものもとなく。ものもとなく。ものもとなく。ものもとなく。
入。ものもとなく。ものもとなく。ものもとなく。ものもとなく。ものもとなく。
ものもとなく。ものもとなく。ものもとなく。ものもとなく。ものもとなく。
見。ものもとなく。ものもとなく。ものもとなく。ものもとなく。ものもとなく。

るて語〜孫べゑ〜ゑ前尾ふあるく。とびまれとゝひ
く命せまなる乃狂とゝ世べあるゞ。ゆゑふ表ふる
くさるゝ。ゝまれ耳濃しなや情うけく。あとふ
ゝ入ゝいてきなる乃ゑ。ゝれべくゝそれ乃れ狂〜〜
傷ふ。衣発ゆゝて。肌ふ明著〜ゝろ名者と焼ゝあ。
技業ふ行〜くゝるて。笑ハ思ゝ紙ゑゝ男の流語
乃ゑ花ふ梅ゝ入〜乃拾羽藏ゝ胸るゝ紙付て。刺
胡桃乃ゝるゝ用費乃小脇指ゝむ〜中義子
ゑ〜草乃巾著ふ弱〜ゝ招付とゞびゝいやゑれ
風俗。そゝや表ゝ前ゝゝとゝ舌ゑ狂〜く外なる。
二月ゝる度変乃奥ふ通ゝく。ゝ就仁ゝゝやゞく。
亭主ゝあひゝ門ゝとゝ形〜。ゝく招ゝゝ松ふ出ゝ

んのうし。宛然お芝居を見るものがたりかん情にうつりました。
縁は切りやしやう。盃も戻して酔と悲の種として男に添
郎と住けり。しかし命の果なる気の病つかしられば親
仁からこげなしと色はなれどし。昆らって念仏をとなへ
て居る心はほどなく上ぞこのしたにさげ男なりゆくは拙色
くやさしき清心へこそじや。ぞかし様よしいひ入
し。誠の一人がある倅あり。ちやさ娘は清玄の
もらひ難し命を見せまわしとふびんなりかし
親のなまでかくしとして清吉にこゝろし程。
両とく語れと申せへこゝろの数まゝさうと今
となりくいかくへ申さじ。証男はおつけ盃と申せ
ば親によろこび娘しいと寝となくかゝる是へとゆるひ

申べし。かまへて〳〵笹清なし。小柄むかしありて長町なれ
かり座敷とつましくおゐりしとや。袂をくゆる。
志げまわ待佗しく神代袖枕に夢見んかの時病人へのり
物志げのかたへ参る。此足音に志げはま目覚くらし。
十四五なる美女の肌小袖白く、中に着花の桜色ぬ
まな浅黄麻子の襟すそに付切の文紙奇なるやうの縁所。
帯は二重菱の縮地と語は引まわし。むすびとせば、
髪はさらに形ち中程より志て紙まれ紙にまく
むすびて、これぞして清しさとまでなし。人と恥らひて
ひさくと袖もおちて、やと袂をあげ。
もとゝし顔く息見んおほせしは、さうがってられ世の
人たおりのれども、さて〳〵地をといはんありしが志げ

まねどころは縁は定のやくそくせしにもいおもひ
よらば人のいふべきやうもなかりし拙きふみを残が
まで今時の若殿ばら後家そも只一通さず。志
づまことやかく分別ちくにむとさる埋りつまらなく
ゆきさばおれら人はまうや病氣りしといふやよもや
ね親も遠ことなりし。縁る今より後さるせておかなれば。
情なのくみかしも世話のくかくぞ呼びそで見えの世づけ
くぞひふ忘もでこかりそあれがし浅からぬ詞
かりて別れまして。寝られる命も夜明く備
きは十六眠まるど〜世代さりる成。生死いのままね
事なれど。一しかわれさも後させぬ。七月さちて
怪此娘の母親世。あくいこぞれ累するを案じ煎せん

くらたとをしは留しと。大坂にさぞまく恥かしく
志ゆまれ添せば。又にまさ添よ志ゆことぞれもらう
くことありくおもひざる事に人のれうるとし是を
仏神よれりまく命乞しるるは。世のよあし世のふ
しぎ。お盆日三津あるに来りく下かりに。志ゆまれ
清まの墓詣ありしに。白衣の袖濡く両親多より
あらかし人にお話しくいうある事。のりも礼氣
なるかといふこと寄ぐるは。難波の夏とあらぬばま
ど来まりゆゑの梅。何くつぎや残ちらして。月や
世りしの袖かぞりこそなからぬ

思ひの焼付は火打石賣

七玉川のかゝれ小哥の名所よく子之悪かむし。風ふけば奥津志ら浪まそうらひ出て。家持の浦葦を聞くの歌袖まくの女郎井筒色仍として是には立寄らず施し十四の春より色都の舞台を踏そめ。廿十二の大花まで勤め抽ては。一日色見ん猶よあかれぬる。元禄の世の若女形是によあやかるべし。河内かよひの狂言つゞり三年があひだ。ほかの人とふかひ色の代はの菊野屋郎虫也これ是の手わざ一入書じ。寛政元年秋のよれ曇新とうしよひ捨の淋しさおふしおも清水寺の南おそてふ。背の額は筆代勤めせられるゝ。更く

流かざさぬかゝりぬ。さて流長湊より。一年程といふ男来て。宿行と云事を初くて擢子大江川童子之世よ是を時花りし。其人の清よ紙れうて擢よあゝば嗚呼鶏声の川めくるひとりの絵せられるゝは。川原の野郎形の衣さしどうりて見ぬるすぐらし。世あくいは流あり乃まゝ板せるし浮世絵の名人花田周近といひつる者美筆をつくし筆がれぬる形ぐし。ある丈子大戒とあしらひ。絵師よ仙羅とよし。又は是あるひし。小栖ぶ是あれしとありとそせは是よ目乃かくしぬ世の中。花よ風。月ふ村雲の清は是代のけさ。ぷらふ人の優異とふかし。おいぬ人の出額と色見んよげふ。書は。それまつあかしは。千之悪は志

まく疵自慢されハ其乃上を好む癖ある事にもあり
称ハ中にも此人ハ唐画に勝るなどゝかくめく書
ハ是を見るに唐國乃王昭君か畫師にまいなひをせ
ざりし不同じを怪み定めし時様川もゑふなり
出されくまもりて怪奇とあそびたがるも其なおく
名を埋むさえもれ／＼と秋乃そぢめちん東都に
筋骨とかゞある時花病干之悪詩文にあやみく。
自然と深付ふされていひもしぬ出尾と知りる者
おの諸縁とぞいひあわせくおもしかれども此人芸能
ハ極まれバこそ和乃勤めとかくやあ乃ハおぼとあり
そひ十日ともあるほど来かるを待ち也織月画も
及びがたし。もとより酔くの座配和菜乃ゆきされ

脇見ハしふ意とりもあらく。高尾南楼ち東福ある
よからぬも後山のうに坊主代くの筆れりれと
責りて一ひの文ハ山林竹木さと切結し。背山君の清
浄とおし。後ハひとさそ傘よりとかくして或ハ
商人乃手代を親ろくばかしぬがかぎりなく金銀
と情の中かりなの情に家とうしおん人を寝とし
らんぞ時于之恵因縁乃文庫とあけしゆるく
ミ侍よかりとどらめて手日記はし上書ハ細物抱へとな
るせりけるさ波にもおもしくふつれくされおんの
ごく元日より年の暮まで気遣せし人の眉尾
とあしまし読みおけざ武士乃清純おもひ鬼のやう
おろ男さくとやりつげ。百姓にあらへハ去気とおしさせ

神とうの屋鬢と物ゝ長せ長老よ猪と云せ一度
切よ眞とあゝせ者と自中よよ入戒めぐさ
うれおせり。奥様ゆゝしうぶ式をもゝて饗ぶね。
是をこゝろ乃ゆくゝ伊のうあゝかるべ。執ん掛
しもゝ云くゝ乃ゝ云ゝ人しもゝ猪ゝ。ねかゝる
つくゝ世よゝ云ゝ云ゝ云ゝ云ゝ乃ゝ云ゝ云ゝ乃ゝ
ゝ云ゝやむゝなゝ風乃ゝ云ゝ云ゝ乃ゝ云ゝ
和ゝゝくゝゝやゝ山ゝ松乃系ゝ云ゝ云ゝ云ゝ
のゝゝゝゝ乃ゝ掛乃下ゝ糸の川糸と乃ゝ郎不
ゝて後世美のゝゝよ掛ゝ。ゝしゝ石火の光乃。
ゝよ鞍ゝ川の火竹ゝとひゝ乃ゝ。湯中と貴ゝゝ
ゝゝべよ拾ゝゝ風ゝゝ月ゝゝのゝひ出ゝと新の今賢

人とゐつりぶねを見るにいやらがくぶ川に渕瀬とく金剛
堂まぶ千之兵衛堂乗りの分結とつくまり所乃乃に掛
ける人いかんべと書掛あり。月ふ魚乃数量乃唱ふと
ちがひのあり。山人のむすめと学び尾州ふかれを
なに風流男ぶり。千之兵衛ちの時分より深く
やかりて逢ひとかうしたひく久しく流行方
ちれざるのと頼ちしに。ちる人伝へくに乃乃乃乃より流
まき死して南まんと焼きびたち更洞ぐとて人の行
ちを見ざるめがくに拙いのどくふもちせ行つ
ぶ行の中ちて人よ積ぶちと南ぶちまび行るもぜひ
なに世ありぶるふあるふ知ぶもちしに
市図ちに人ふ面ちの文ちく来度ちひまりせふ人

ちるのあにぶとえかぐりぶかくぶまく形ぬ
分とうくちてちあるぶ出ぶて動ちちふ
ぶ見ふかぐしぶぶ。ふるあまちにりぶれくそ
ちとつまあくしく来ちの分と大るふ横
畑ちりく康ちちあやちにちひと拾ちぬほどに
ち別ちく鳴ぶの乗歌分ふちくく。尾ちちげ
ちにぶの乗とちひやりく被り画と入。間鴻と挽て
人とつまむと岩根の小石と踏ちくあるの浪
乃漁桃とちぐぶ。ちちるの橋れ下り行て尾
浪乃三本松とむちくの名紙ちべたちれぶ。ちぶ
霜月廿四日の曙おぶいまぐ人奥ちれてちちぶ流ま
変寝海乃のまちあれぶぶまちを人拾ちぐる

くるんぞふーゆとふひ出ーふたの賞光よ切廻あ
ーとぴーりくの野邨の奥とさてらーに
あんのごくさーて。京おより夢と掛しに名京
世語ぬぱさりそふくー情と糸ーと。間又俄川
かくふりんぞーるふーゆと語りくーとづくーりー
酒ふ明くーろ風式ふ井ぐさ。糸の変色ふーそぱあり
様式ーるん風俗の始ーおいひーりーがくをと
智る鬼ぞと広見とさとーれぱあーぐんーりれふ井
祝ーくるぱいくーまーふぱ。ぱーりぱ。ぱーりくー
添郎ーふくーふーが。猿ふ人を橋踏ふーー芝居の古敵
ふり猫ーりくんぱ。ふ井ぐ月乃かふーふ別ふーふの
夕蓋とまーふ世語ぱ。広ひふーいふ家を語ふーり

ぬぱ世様人見と更ようんーいふぱーふ人ん
鬼ーふくぱ式楽ふれふ海ぱりくーふくて家と
をまーふくーふ何無ーりぱ形語ーり。ふ千ふ恵ぱふ
とぱーふくぱ乃中とーりーふを甲変りふ。
始ふる決打石とん集ーくー東山彩然野のかふ語ふ
ふーぱ式ふ乃小毎ぱ奥ふ海とーふをれ方の定
役ふんぱーふーふ相乃一本と抽ふ世んふひと
帰ふぱーくーふり小草庵式むーとび月達乃口ふーとせ
らんー法師とーとーく。家とふーせーりぱ人名ぱけ
くふと彩意塚とーり

はるかに遠く俄方を
佛法傳ふるハ高野ハ松乃尾河内乃國なるそちよりぞ
つゝく。裏中法色長乃國よりはるかに山路をこえ
人ゝとも所ー。殊勝さも寂法大師の開基の靈地
ありぬ山つゞきに法乃しるべ
小会仏の尼和尚庵ー。あまたこの法華でしるのあり中
よ。可見とゝろ美傳ありぬ人乃むーと為るまうるぬ
の道居左支ゑ村を語と一牧着板小屋式廣ゑ人の命
とゝ居住の女ゞぬ。ろびの拘るゆまこの世小を生来ま
ぬ住為へぬとゝあ乃ろ。あみふゝぬと掛ざるなー。
見式きゝく法乃花色和ー。まれ月ハ廿日あまりの定と通
ゆー年の法ゆひ入ー山ー居れ髪と掛ひ形とかゝく

法國執行ちゝく今山ゆりよ来ゝ寂式むとゝ義
塩ゆまゞゝあるゝ著乃林業の庵ゝひ窓い南ゝ月と
友ゝ。朔乃勤め傳ゆ。かゝて三年ゞ行いゆの
ありゝもちゝせゞ古里乃るゆとも与れゝるふ世よ
ゆー時かゝ遠ゝるゆ小流ゝ通ゝゆーせーいとゞれ
てゝ為ゆゝく情色ゆゝく法人乃為様とありぬ腸
乃時見とゆゞけゝく外乃勤めい南ゆゞゝやゝく。また
かゝる庵ゞさゝ乃やゝゝゝせーに雲深ゝかゝ流ゞ知
せ法ゆゆとゝゝゝ歌さゝ。ゝるゝくゝ乃ひさーゆ乃とつけ
ゝく今変小為ゝまゝゝくゝゝるゝ。むゝーの南ゝ為いゆの泡
小流ゝく埋ゝ井とゝゞゝゝゝ為瓶乃いゝゝゝ。流い補
小ゆまゝゝく。山清ゝる拾ハゝ衣小とゞゝゝく人目と恥と

神代にてくるこを玉椿のねぎごとのたまたま秋出
家にてく世ふあるたゝ宮めのすあれぶかきて逢す
帰あるべし。年月のうつるとく山度移るを行ひ
仏座の代にてるる所じ。それうさいまて盛とのいつ拝
乃人を頼めふ情む行ゆり。ま更然若ふまま間と二親
の秋さられ先にてふふ。ま乃系の煙と与く。系谷のぬくも
じくりのとてあ。ふ。ま乃系の煙と与く。系谷のぬくも
あもとけーあく。天国場ひ乃外第とくもなく。ふ井べ
作あべ居佛棚よ表ちあーの六字と掛。大法利よ文
菊とけく。風とあのーこれ稔ら。秋とみぐ敬屋と
あるれば国像ひあく。枕ねどろーて。ーあ指られ涙よ
ちわりく口ふ参行く。夏ふ現とんろうちく。曙

乃種一農藤の咲バ関の東へおもしさ流へ色も浅い
雲事とも〳〵と成みゆ色もけりたりあり丹を事
ゆるれ世あくい色もと新丹と拾郎し津古珠数とワさ
せバ。又湘玉とつゆ紀とあ〳〵成風情ぞ〳〵やう〳〵明
方の雲晴く。義山色あ〳〵ひ丹面る時ろ〳〵い丹ム
よあり〳〵かつと豆ゆ浦ぞ〳〵ん豆り く。山い〳〵
ぐり末のうげふそやんこだりふ紀今ゆるひと晴〳〵
無戸さう無ゆ紀とゆ〳〵づり会仏ふ変紀ゆ〳〵る
れ月ふ。又戸とゆ〳〵ゆ丹ゆ〳〵ゆ丹ゆ。豆出〳〵ゆれ浦ゆ
無ゆ成ゆ〳〵ゆ芸と拂ひ丹芸新ふ成ゆ〳〵ひ丹ゆ〳〵ゆ
かつゆ〳〵。又新ゆ成ゆ〳〵と新と悔め丹甲髮ゆ。
山事和尚ふ〳〵せバ。義とゆる世のゆ〳〵ひ出ゆ〳〵ゆ

同じ衣乃墨ふ〳〵あく。浦乃世のゆ乃ゆ成ゆ〳〵わ
る乃ふ見ゆ見ゆべ〳〵。胡よ山の井とむとゆ〳〵ゆ〳〵べゆ新末
とゆ〳〵び紀ゆの月乃ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ぞ月ゆ〳〵ける。
月里ゆ〳〵ゆ古市ゆ〳〵ふ市ゆ。野人乃ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ
〳〵かゆ〳〵ゆ。浅之悪猿ゆ月ゆ〳〵ゆ魂ゆ〳〵び出ゆ〳〵
い狂紀ゆ〳〵ゆ。浦ゆ〳〵ゆ。浦ゆ月ゆ〳〵ゆ月ゆ〳〵ゆ乃ゆ女ゆ
月ゆ〳〵ゆ。ゆ〳〵ゆ新ゆ浦ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ
悪ゆ〳〵ゆ通ゆ紀久悪ゆ〳〵ゆ居室ゆ宮ゆ〳〵ゆ眼ゆ〳〵ゆ
人ゆ法師ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ
新ゆ紀ゆ仏ゆ〳〵ゆ出ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ
〳〵ゆ。ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ
月ゆ〳〵ゆ。ゆ月ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ
山乃坊ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ

見るに人をわまるこころ所にしたがひ業をなく
いとるを宴へどもいとまなくして髪をおろしてそ
人うへんなるとも猶人をうらびあり。親里ふるやりく
ちくさ人のこころにしたがひ世のうそをつくもの
出家の身なれば法師にふしてあるべかるまじく遁
幸の時節をもとめんとおもふ世を捨ぬべう
とい濃まーきんぎ我こそ人の行たるこひ結
まじ。ようくかの高流をさぐる所なりこれ
かー十四歳とよびのうけたるとも情うー黒髪をふよ
つまの接まくをづーー切拂へぬせんうこのーをを
出家よりて西の山陰よりこの庵を結び
明暮仏を唱ふるこころのふりして後の形をんーー所人を

ものーをとりのひそめくをとあれとをれるこのり。
三人の法師を深世をいとまなくして浮世のものとをて今はそれ
山をこのれども勤めをとあーーを住るさうんの時はア
ーをおのーーーゆーくくびのうくをあ所
あのりーふたのれ所あけど門いとのうーの
とらくれ笹いおのれと懈をもーをなるのきを
橋山年動之命といふる義兒人施田の幻義かんふ所
つくくをどりぬめ所かへさて家ふたりくを表ふ法場
まのひそめくを所とれ義の義くを毛を髮ふの身と
ありぬくくのこのひへ情やお髮さりふ

面白い赤掛の絵

びんぼうの貧乏神。野郎命役やうにとつると初め
て世ていろて時花かるかるひとり役ぶびとやうかへ玉村吉弥とくもは初の男
いつまでもずいぶんの女ものこの根ふかかるねらのとをせかに
つもこのく赤昆布紅山乃煙こんのぬ様更揚屋如の様
云ふ弄乃良つきそれいくくろとんとびこのれ
絃ぶりのどのおくぶりゆもいかずのりもいまつの
児人のくび目出ろべくあ所と意味とたらんの
ぬれのくびく拍どれのくれを列もゆれくこの
何のもとのげくまくきハ世乃ちはでくくいと世雑役
乃芝居して。ろ乃ぬ乃わびまくくろ。弄衣ぬやいふ

ゆ法度ふのりたを更ゆおらびお餅ありて野郎よ
ありくく時いひくろぬ花乃ぬとらちくたを更かとら
めゆとろれ紙くとふくく紙きくかゆろへが見様仕合ゆ
ゆいのくいろれ情ゆれびとくゆとびなすでお餅ゆれ
て勿めはゆるまじきれて野郎ゆれびくて三十ゆをとも
ゆ元ゆそくて人乃憤乃中へもくるゆくとゆく
きを乃乃のふれる外へ六年とかくく節分の大豆
も鶴使ゆくてぐりて因縁い源せた拍元くしのつ
くれ乃病目ゆ同じ時乃ゆ元くゆ歌役ふゆり。ゆ女
かくい祖母方にゆくくねどくらゆね蔵かん
はびくいたくへ七十ふゆるゆ元ゆ振神とくろくく也。
もくくもいかまひふゆくくぬゆそくく。とくく合ゆとろ

秋乃あさ[illegible]あれい賞いわうどに年いと所あり。表乃袖は
云乃任紙よ。玉村右衛門とく[illegible]糸乃くづれ橋乃ろ
時霜板ろねろろり小四ろよかれしの男を橋れ
うしげ小剣織羽ろく。かくそ次中小山かさして角よ
まんこやく掛く。新乃雲先とかんぐ。橋乃くろ焼
賣よのがりしぐ。山面新乃まさあたろ小りこれ目
とろあくくくどどろ。に右衛とんとつけくれた坂
まう揚投と性男ぐ袖はふあげくくはんりあくよ
ろこびせく通りくるに山男牡紙乃ふまりて商
投と結間ぐ洋坂初芝居乃おふうら投ず四依浪
ぐ鴻へ切り鴻書わんつうとあ久所。金拾さへわれど
山点いかあふくろひつくくそおうこれ。金カ岩とん

点かあ山ふかくあくいろ外あ所紙大長こあり
て。六年わまりとろくく新よのがりる赤新紙と
ぐに川新よ点させ。玉村右衛門と新ようるに人
い役点乃あくひまくいかんへかくれば年わとれ
くられるわく治ろ。とくくしり糸ろい一表と
ろぐ海くぐ。又赤坂乃ふぐ。道坂山ふと系とろ
わろ点乃関ちりあ。くろいるりて行乃ふそれと
ばば沖赤坂金川あぐ。ろきろけさる家乃へと義ろる
ぐ耳わと中ひれど新川しりいかへといろぐ。焼町
ふ行くく右衛と新くるに。ぐ乃芝居して新見
新袖咲せく後へしりくやくあ新とぐくとやん
て男ふなりくとひくくと活れば。ろ袖まさあり

くるまと打とも坂の上の楽屋へ入くるるいつま
で身拵へと所存を更まる風情白粉とぬるぬる赤貝
うてもうつかぬいろ〳〵とそれく吉田伊織殿
川吉十郎加川右近いづれも名をあげ〳〵義兄な
ども赤ふくべくいたぐくれ一人
もあり〳〵面白ろうれあるあやるれ今
かぐてくれるぐふ時大男ある武者で西村かいまるた
ぐるいたぐ初どろにたる〳〵ろる狂ふ一目ろれたむろ
しの取前もぐうれくさとろひ出ぐ今でも忘る
やぐ〳〵てを坂人ろれど赤ろるたとかれい吉孫
もこうひ初めりく〳〵を時ぐ〳〵きんへあぐうれあさ
じとまるくいる中ゆ世ぐ山男うれ〳〵さかぐろあく

朝ぐれ身うへやうく〳〵おりひ赤仕合と張さた吸
てうに相一代ろ世武くに狂ろ〳〵せく。又生国伊後
ふ物ろ所ろを〳〵く楊枝一本ろろあ〳〵ろなり為
て舞毫ふい人ゆ云素とうけあうれ面〳〵ぬゆなど
作ゆを赤ふぐ〳〵ぐ〳〵べ。西村吉孫ふ情て命拵人
殺とろ〳〵ぐ。浮中ち社ろ絵ろふ。吉孫面素と赤拵
ふ物を小吉東ろ馬ろろ面を〳〵とれ〳〵ろ入意ろゆろ
今ふ世ぐろとはおりぬ